していきました。

戦後の混乱の中の昭和20年代は、食糧不足対策が緊急の課題でしたが、市内では昭和23（１９４８）年に梅郷開拓農業協同組合、昭和24（１９４９）年に七福農場開拓組合と木野崎農場開拓組合が設立され、緊急干拓・開拓事業を重点的に進めました。

また、昭和24年の「土地改良法」の制定により、市内にも数多くの土地改良区が設立され、用排水系統の確立、排水機場やかんがい施設の整備など、さまざまな事業に取り組んでいきました。

田植えの合間／昭和32年5月・目吹／写真提供＝鎌形寿夫さん

乳牛の品評会／昭和30年11月10日・桜台

カルチベーターのテスト／耕耘機が普及する以前にカルチベーターという耕起する機械があった／昭和32年ころ・目吹／写真提供＝鎌形寿夫さん

戦後は質の高い煙草栽培も

野田の畑作は、昭和20年代から30年代にかけては煙草が中心でしたが、重労働を伴うことや価格の下落などにより、次第に白菜へ替わっていきました。

白菜は、昭和25（１９５０）年ごろ練床育苗の技術が普及すると急増し、昭和30年には約300ヘクタールに広がりました。昭和30年代後半になると、大根やキャベツ、トマトやキュウリ、ナスなどのトンネル栽培も導入されました。

千葉県東葛農業改良普及所の野田支部に勤務していた横田太三郎さん（関宿町）は、「トマトの栽培は昭和24年ごろから普及し始めましたが、新しい技術が入るたびに収穫が上がり、収入も増えていきました」と、当時の印象を語っています。

また、関宿地域や川間地区などでは昭和20年代から、酪農が盛んになりました。これは、戦時中の内閣総理大臣を務めた鈴木貫太郎が、終戦後に故郷の関宿へ帰り、河川敷の草地の利用を酪農と結びつけ、発足した農事研究会で酪農を奨励したことによるものです。

枝豆は全国有数の出荷量に

昭和40年代になると、ビニールハウスの大型化が進みつつありましたが、昭和44（１９６９）年3月、県北部を襲った記録的な大雪でハウスが倒壊、被害面積は8万平方メートルにものぼりました。それを機に農業を離れる人も続出しました。

このころ、トマトに替わる野菜として注目されたのが枝豆です。古くから多くの農家が自家用のみそ作りなどのために大豆を作っていましたが、昭和20年代後半から旭地区の農家が枝豆として栽培し、昭和32（１９５７）年には目吹出荷組合で出荷が始まりました。

兼業率が高く経営規模が小さい当地域の農業形態にも枝豆は適していました。重労働にならないため、女性や高齢者でも力を発揮できます。

また、枝豆は栽培期間が短いので、出荷時期をずらす必要があります。このため耕地面積が小さい農家の方が生産性を高めることができるのです。昭和55（１９８０）年には約400ヘクタールという全国でも有数の出荷量を誇るまでになりました。春夏は枝豆、秋冬はホウレンソウやキャベツという「輪作体系」も確立されました。